

初めて紅葉先生に見えし時

泉鏡花作

明治四十三年二月

東京牛込横寺町一尾崎一冠木門なる御名札を
あふぎて、先づお住居は知れたり。實に此門に參ら
ん事、積年の望みなりければ、其儘心なく容易くは
入りかねて、我にもあらず小戻りして、用も無き小
路に折れ、とある杉垣の袖にイみしが、何時まで恁
くてあらんとて、衣服の襟を繕ひつゝ、兎角して、
門の内を二三十歩、又格子戸の潜りあり、靜に開け
て立向ひ、慮外ながら、御免下さいまし、と申しゝ
に、返事は無しに、奥の方より聲音して、年老いた
る女性出で給ふ。先生は、と伺へば居りますが、と
申さるゝ。少々お目にかゝりたう存じます。然らば
待たれよ、とて引つ返されつ。やがてこれへ通らる
べし、と玄關の次の室なる八疊へ通されぬ。予は其
の端に畏りて、一六氏筆、雅俗折中とある額面を仰
ぎける時、以前のお年寄、煙草盆を出されつゝ、一
服して待たるべし、まだ寢て居ます、と微笑まれぬ。

このときこのひ、空晴れて、小春日の朝のうらゝかに、庭
此時此日、空晴れて、小春日の朝のうらゝかに、庭
樹の梢に雲もなく風爽に天澄みぬ。明治二十四年十
月十九日午前八時三十分。

南向きの縁側に、楊枝使ひたまふ音せしが、しば
らくして、隣の茶の室の襖を半ば、半身を差し出さ
れし美しき御方あり、後に知りぬ、令閨よ。しとや
かに御會釋ありしが、立ちて、お縁の障子を開けて、
此方へ、と導き給ふ。謹みて従へば、階子段を指さ
して、二階へ、とお教あり。其のまゝ茶の間へ引返
さる。金澤の公園なる榮螺山の如き螺旋の段を、お
づ／＼と上りしが、貴き机を前にして、意氣な火鉢
を膝許に、紅葉先生、お年は二十三四と押しぬ。五
分別にして緋の羽織のゆきりゝしくも見え給へり。
予は威に打たれ頭を低れて、此御方に、あの媚かし
き色懺悔あるに驚きぬ。然りながら威嚴たゞ威嚴の
可恐しからず、申しやうなく敬愛すべき御口許ぞ懐
しき。さて怪む、予は年十九歳の今日の今、初めて
温容に接せるなり。勿論日に日に、都大路も境遇に
より蜀道の嶮を走る時も、モシヤそれかと仇人をさ
へあこがれつること幾度かありたれども、見えしは

初めてなるに、何となく御面顔、心のうちにあり／＼と初見參とは思はれず。憚り多き事ながら、夢にて見しに變らせ給はず。憶起す、故郷にて色懺悔を讀みし時より、我日本の東には尾崎紅葉先生とて、文豪のおはするぞ。と崇敬日に夜に止む能はず。また風雅娘に接しては、相見ん思の切なさに、玉の緒もゆるぎつゝ、夜半仄暗き雪の灯に、愁然として遠き其の百里の彼方を仰ぎにき。三たび紅子戯話に接せる時、覺えず、爪立つて衝と起ちし、魂はそゞろに飛んで、硯友社の空にやありけん。さて、上京せし其の夜一夜、神田山本町の知合の二階へ宿りて、明けなば東雲の雲を衝きて、横寺町にと思ひしが、事は心に違ふかな。かゞなふれば其よりこゝに約一年、其間の経歴は、わが友よ。君の想像恐らくは、其の實際を誤らじ。然りと雖も、冬の月、花の雨、僅ばかりも浮世の態を見覺えしは、麻布の霜の味噌漉なり、上野の涙の袖なりけり。

また明神坂の侘住居にも、五軒町の落魄にも、或は由井ヶ濱のさすらひにも、片時、と雖も忘れざりしは、先生にておはします。奇なる哉、心凝つて幻

に描^{えが}きしを、今^{いま}まのあたりに見^まえしぞ。

（此^この記^きは其^その當^{たうじ}時^{こき}故^{こき}郷^{やう}なる友^{とも}と^もに送^{おく}りしものゝ一^{せつ}節^{せつ}なり。今^{いま}ことさらに修^{しう}正^{せい}せず、見^みん人^{ひと}、言^{ことば}のをさなきをわらふなかれ。）